

第20回日本エイズ学会シンポジウム記録

看護ネットワークを活用した HIV/AIDS ケアの可能性

The Perspective of HIV/AIDS Care Utilizing the Nursing Network

織田 幸子

Sachiko ODA

独立行政法人 国立病院機構 大阪医療センター
HIV/AIDS 先端医療開発センター
HIV コーディネーター

2006年12月2日、第20回日本エイズ学会において、日本 HIV/AIDS 看護学会 (JANAC)、国立国際医療センター/エイズ治療開発センター (ACC)、日本看護協会の協賛と2007年度 ACC/ブロック拠点病院実務者担当公開会議を兼ね、4名の演者を迎えて「看護ネットワークを活用した HIV/AIDS ケアの可能性」というテーマのシンポジウムを開催。参加対象は主に拠点病院の HIV/AIDS 担当看護師「HIV/AIDS ケア」「慢性疾患看護」「継続看護」に

関心のある看護師、助産師、保健師、看護学生などである。

1. HIV 医療における看護の10年とシンポジウム

日本のエイズ診療は1997年に厚生省通達により、政策医療におけるエイズ拠点病院体制が全国8ヶ所(14施設)をブロック拠点病院とし、そこが中心となり370施設のエイズ拠点病院が設置され HIV 診療が開始された。

10年目を迎えた今日、HIV 感染症は慢性疾患と認識されるようになったが、未だ治療は不確実なもので治療と生活との両立は困難を要している。従って、HIV 感染症に関係している医療者としての看護師は、情報提供や相談対応しながら治療成功に関する、身体的、社会的(経済を含めた)、精神的な複雑多岐に渡る問題・課題に対応でき解決がはかれるよう支援することが必要とされる。それは患者自身が健康管理が出来、自立した生活を続けることへの支援である。

HIV 医療における看護の公としての活動は、1995年に HIV/AIDS 看護学会研究発表会 (JANAC) が発足し会は毎年の開催に始まる。次いで1997年 ACC が設立、同年からブロック拠点病院の HIV 担当看護師、医師の研修会が実施された。1998年から定期的な会議等を開催、全国のブロック HIV 実務担当看護師間での連携もはかれるようになり拠点病院、一般医療機関とのネットワークも広がりつつある。又、看護協会も取り組み始め、本シンポジウムでは、独自に活動していた JANAC と ACC、看護協会が手を取り合っただけの開催は初めてのことである。しかし、それぞれの取り組みには、問題・課題はまだまだ明確になっていない。そのためこのシンポジウムは看護問題を整理する良い機会となった。

2. ACC 看護支援調整官島田恵氏の発表で「政策医療における ACC/ブロック拠点病院の看護ネットワーク」

島田氏は

第20回日本エイズ学会シンポジウム
看護ネットワークを活用した HIV/AIDS ケアの可能性
12月2日(土)15:40~17:40
日本教育会館8F 第一会議室

●地下鉄都営新橋線・有田半蔵門線神保町駅(A1出口)下車徒歩3分
●地下鉄都営三田線神保町駅(AR出口)下車徒歩5分
●地下鉄都営東西線竹橋駅(北の丸公園側出口)下車徒歩5分
●地下鉄都営東西線九段下駅(6番出口)下車徒歩7分
●JR総武線水戸橋駅(西口出口)下車徒歩15分

日本教育会館
司会:村上未知子(東京大学医学部研究所付属病院 コーディネーターナース)
織田幸子(NHO大阪医療センター HIV看護専門職)

演題

1. 政策医療におけるACC/ブロック拠点病院の看護ネットワーク
島田 恵(国立国際医療センター エイズ治療・研究開発センター 看護支援調整官)
2. HIV/AIDS看護学会(JANAC)の活動と課題
有馬美奈(東京都保健医療公社 荏原病院 看護主任)
3. エイズ拠点病院におけるHIV/AIDS外来指導の現状と課題
徐 廷美(東京大学医学部 健康科学科4年)
4. 外来診療において看護師に期待する役割
加藤哲朗(東京慈恵会医科大学付属病院 感染制御部 医師)

対象 主に拠点病院のHIV/AIDS担当看護師または「HIV/AIDSケア」「慢性疾患看護」「継続看護」に関心のある看護師、保健師、助産師、看護学生 140名まで

学会参加登録料 一般:10,000円 学生:5,000円(当日会場でお支払い下さい)

※このシンポジウムは、平成16年度看護政策研究事業委託研究「HIV/AIDS患者に対する外来療養指導の効果に関する研究」の一環であり、平成16年度ACC/ブロック拠点病院看護実務担当者会議も兼ねています。
申し込み方法等裏面

著者連絡先:(〒540-0006 大阪市中央区法円坂2-1-14 独立行政法人 国立病院機構 大阪医療センター 感染症科)

2007年4月24日受付

- (1) 政策医療における「エイズ拠点病院体制（ACCの設立の経緯）」について解説
- (2) 「ACC/ブロック拠点病院看護実務者会議」の紹介、有機的な連携を図るため拠点病院の責任で担当看護師を決定していただけるよう推進
- (3) ACCとブロック拠点病院の連携は、ブロック担当看護師向けの研修機会の提供が会議へと発展したことを紹介、年3回の定例会議へ
- (4) 患者紹介や受け入れが日常的な情報交換などの実施、ネットワークを活用したHIV/AIDSケアの紹介（連携事例、看護相談事例）
- (5) 担当看護師は「何が出来る人なのか」、担当看護師の条件について看護ネットワークを生かしたHIV/AIDSケアを行うために、「担当者」「窓口役」が明確になっていることの重要性を指摘
- (6) エイズ拠点病院体制整備から「政策医療におけるHIV/AIDSの看護の仕組み」
- (7) HIV/AIDSコーディネーター配置について、目的、対象、方法についての説明

その役割として ①初診時の対応、②患者教育、③服薬支援、④サポート形成支援、⑤他科（部門）との連携等
最終目標は、患者参加型医療/患者主体の医療の実現をあげられた。

ACCとブロック拠点病院実務者担当会議は1998年から開催され、目標は情報の交換、学習、知識の向上と連携を図ることとし、その利点として、政策医療の中でブロック拠点病院の役割が明確になり、これに準じて病院の方針のもと「(実務)担当看護師」が決まり、役割遂行のための環境が整っていった経過を報告された。

更に課題として、「実務担当看護師」の雇用体系をあげ、職位が様々であるため、病院看護師には専門家としてのキャリアアップが出来ない。その事により、院内「(実務)担当看護師」のシステムが恒常化しないと指摘。それに対しては「専門看護師の資格化」を重視、それをもとに診療報酬算定化されることで、HIV/AIDS看護の充実を図れ、又、政策医療において看護の目指すものは、ブロック拠点病院・拠点病院の専門看護師の配置と育成により「全国どこでも安心して、HIV診療が受けられる医療体制の確立」が患者のQoL向上に繋がるとまとめた。

3. JANACの有馬美奈氏「HIV/AIDS看護学会の活動と課題」

- (1) JANAC (Japan Association Nurses Aids Care, ナースによるナースのための自立的活動)の設立の目的、経緯と設立主旨の説明
- (2) 活動内容(研究発表会、ネットワークの推進、教育・

研修の企画、情報の提供)の具体的な紹介

- (3) JANACの現状としては、
 - ① 拠点病院以外の看護師の参加が多い
 - ② 経験の少ない看護師への情報提供の場である
 - ③ 経験豊富な看護師の自己研鑽の場である

「HIV看護を学びたい、関わりたい」、「患者が来たけれどもどうすればよいのか」、「担当者になったけど、一人でどうすればよいのか」、さらに「知識・技術を高めたい等」と思っているナースのエンパワーメントになっている」ことを話された。

- (4) 課題「公的・組織的バックアップとネットワークの欠如」

- ① 自立的活動としてのHIV看護、
- ② 活動範囲・活動内容が限界、
- ③ マンパワー・質的向上の限界

政策医療としてのHIV看護からの働きかけから、HIV看護の専門性の確立が必要と指摘された。それは、専門性の確立は日本のHIV看護の大きな課題とし、看護ネットワークを生かしたHIV/AIDSケアを行う為にHIV看護の専門性の確立に向けて、政策医療としてのHIV看護と自立的活動としてのHIV看護の連携の強化が必要であるなどと述べた。それには、

- ① HIV看護のネットワークの拡大
- ② HIV看護に特化した技術を提供
- ③ 看護独自の機能を発揮したチーム医療の強化

の3点が大切とし、HIV看護ネットワークの拡充が私たちに出来ることと締めくくった。

4. 東京大学医学部健康科学科の徐延美氏「エイズ拠点病院におけるHIV/AIDS外来指導の現状と課題」

外来看護が中心となった背景からチーム医療加算の新設された背景と全国の拠点病院調査の結果と看護師の外来指導実施状況、施設基準整備状況と今後の計画、課題を発表された。

- (1) 患者が一施設に集中傾向があるためケアの質に不均等が生じないようモデルとなる施設を中心に看護ネットワークを活用し連携を図る必要がある
- (2) 7割近くの施設でHIV担当看護師が決定していたことは、看護ネットワークの充実を図るために好条件となりうる
- (3) 専従看護師を配置し、HIVに特化したケアを充実させることによって、患者QoLの向上や医療費削減にどのような関連があるのか、今後の調査によって明らかにする必要がある

チーム医療加算要件の評価のためにも今後も上記調査

が必要とまとめている。

5. 慈恵医科大学付属病院, 加藤哲朗先生「外来診療において看護師に期待する役割」

(1) アンケート結果より

HIV/AIDS患者のマネジメントには、チーム医療が重要とし、なかでも看護師は、患者の最も身近な存在であり要である。看護師ならではの役割をいかに果たすかが求められると始まり、慈恵会医大病院のHIV/AIDS診療の紹介とHIV/AIDS患者に携わる看護師対象のアンケート調査の結果をもとに話された。患者の増加はどこでもそうであるが、HIV診療に関するすべてを医師が実施しなくてはいけない現状にあり、もはや医師だけの診療は不可能である。それは患者に提供する医療の質の低下が懸念され、キャリアアップした看護師との「協働」に期待したいと述べられた。ついで、「HIV/AIDS患者の看護に携わる看護師が感じている実践に関する不安・希望を把握し、ネットワーク活用による、解決・実現の可能性について考察を目的としアンケートをされた。その結果、HIV/AIDS患者の看護に携わる看護師48人中、経験年数は1年未満が16人、次いで2年未満が11人と半数を占めている。不安な点として、「経験不足」、「医師が不在の時の対応」、「HAARTの実際」、「基礎知識」、「生活指導の実際」、「社会保障」、「誰に聞いて良いか分からない」等で、HIV看護に携わる基本的な知識に関することであった。全員が研修を希望し、内容については、「疾患の基礎知識」、「看護ケア」、「HAART」の順であった。その他の意見としては、「患者の最も身近にいるのは看護師で、患者の気持ちをどうくみ取り、引き出すかは看護師だから出来る」、「実際に先輩の患者指導と一緒に学べることが一番良かった」又「自分が指導しているのを先輩にみて貰い、アドバイスを受けるのも勉強になった」「頼れる存在がほしい」という結果であった。

結果からHIV医療を充実させるには、知識習得の機会、実際の看護経験(キャリア豊富な先輩看護師の指導)、情報の共有(カンファレンスの開催)、困ったとき頼れるものがあると述べられた。

(2) 実際から

現在実施されていることとして、カンファレンスをはじめ、「新患症例、問題症例」などを感染制御医師、外来看護師全員で検討、勉強会(疾患・薬剤などについての基礎知識)などを紹介された。研修会へは医師のみでなく看護師も参加とのことであった。

今後望ましいこととして、ある程度「公的な、知識習得の場」、「病院間での情報交換機会」、「医師・看護師・薬剤師・MSWが一堂に会したカンファレンス」、看護部への「積極的な参加の働きかけ」、「相談・利用する事の出来る人・ツール・ネットワークの充実」、「HIV/AIDSケア看護師の資格化」をあげ、最後に再度、チーム医療の中で看護師が要であるとまとめられた。

6. まとめとして

4名のシンポジスト発表終了後は会場とのディスカッションがあり、幾つか質疑応答があった。

発表を通しての共通するキーワードは、

- 1 連携の強化
- 2 HIV担当看護師の位置づけとして、「資格化」を政策医療の中で確立

が今回のシンポジウムで一致した意見であった。

2006年診療報酬改正に伴って「チーム医療加算」が算定されるなかで、専従看護師が入り、HIV看護も診療報酬点数加算に加わることができた。これを機にHIV看護を根付かせ、一日も早いHIV専門看護師の資格の確立に向けて努力し、一方、ネットワークの強化も同時に進めて続けたい。

最後に、三者による本シンポジウムの開催は、画期的な事であり、ネットワークを築き始めているとも言える。共催は、ネットワークの存在意識・可能性を拓き、引き続き三者の連携を取りながら日本におけるHIV看護の充実に向け、力を合わせて行けることを願いつつ、最後にこの場をかり、4名のシンポジストの皆さんとJANAC、ACC、日本看護協会の皆様にお礼と感謝を申し上げたい。